

生教材を使った発話を促す授業
—ビジネス語彙・表現の習得を目指して—

**Speech Encouraging Classes Using Realia As Learning Materials
For Acquisition of Business vocabulary and Expressions**

関かおる・酒井祥子・多田苗美(神田外語キャリアカレッジ)
SEKI Kaoru, SAKAI Shoko, TADA Nami (Kanda Gaigo Career College)

要 旨

2年後に日本社会で働く予定の大学院留学生に生教材を使ったビジネス日本語の授業を実施した。発話量を増やし、ブリッジ人材として不可欠な高い日本語運用能力を育成し、さらに留学生が汎用性の高いビジネス語彙・表現を使うことができるようにと試行錯誤した結果、入門で来日した留学生が日本人とディスカッションできるまでになった。本実践での試みが日本語の発話量を増やし運用能力向上に一定の効果があったことが示唆された。

By using realia as learning materials to conduct business Japanese classes for foreign graduate students anticipating employment in Japan, we were able to increase verbal output, develop strong language skills essential to international human resources, and enhance acquisition of general business vocabulary and expressions. In two years, our beginners were capable of discussion with natives, suggesting that our approach is effective to a certain extent in increasing verbal output and raising level of proficiency.

【キーワード】 生教材, ビジネス日本語, 日本語運用能力, 発話量

1. はじめに

神田外語キャリアカレッジ(以下KGCCと記す)では、経済産業省と文部科学省によるアジア人財資金構想「高度専門留学生育成事業」(以下アジア人財と記す)千葉大学ビジネス日本語の授業において平成19年4月から23年3月末までの4年にわたり、入門からJLPT1級(当時)既得者までのレベル差のある日本語研修クラスを委託され担当した。クラスは年度によって合計時間数は異なるが、通年週2回、1回3時間~4.5時間実施した。週2回のうち1回は留学生の日本語レベルによってクラスを分けることができたが、1回は物理的条件で2クラス設定することができなかつたため、様々なレベルの留学生を1つのクラスに集めて授業を行った。生教材を使った授業は主に後者のクラスで実施した。ビジネス日本語と名付けられたこのクラスはアジア人財の留学生にとっては必須ではあるが、大学の単位認定科目ではない。

2. 背景

2-1. 留学生の背景

対象とした留学生は千葉大学大学院工学研究科に在籍する大学院生である。内訳は平成

19年度1期生10名,平成20年度2期生8名,平成21年度3期生9名,平成22年度4期生8名で合計35名である。このうち,1期生だけは日本国内の大学を卒業したり,すでに千葉大学に在籍していた留学生からの選抜であったため,日本語のレベルは高かった。しかし,2期生以降はすべて海外から直接来日した留学生だったため,自国で日本語を3~6か月学習した者がレベルとしては一番上で,まったくのゼロという留学生も多かった。また,全員工学系ではあるが所属する研究室は様々であり,日本語使用の状況も留学生によって異なっていた。時間数,国籍,男女別数は以下の通りである。

表1 アジア人財ビジネス日本語実施状況

	1期生	2期生	3期生	4期生
1年目		216時間	225時間	174時間
2年目	156時間	207時間	193.5時間	196.5時間
男性	8名	5名	5名	4名
女性	2名	3名	4名	4名
国籍	中国8名 韓国2名	中国4名 韓国2名 マレーシア1名 香港1名	中国2名 韓国4名 マレーシア1名 インドネシア1名 モンゴル1名	中国3名 韓国3名 タイ1名 シンガポール1名

前述のようにビジネス日本語のクラスは週2回実施されたが,このうちの1回は入門の留学生のためにレベル別のクラスを設定していたこともあり,映像を使って実施できた授業は1期生を除き週1回である。また,千葉大学には在籍する1000名近い留学生のための日本語クラスがあったが,残念ながらアジア人財の留学生は研究その他の理由で来日後3~6か月参加するにとどまった。

2-2. 研修の背景

KGCCは,主に社会人向けの企業研修を企画,実施する機関のため,受講生の様々なニーズに応える必要があるが,その中でも「可能な限り短期間で話せるようになる研修」を望まれることが多い。話すためには「聴ける」ことが必要になると考え,研修では市販のテキストにとどまらず,並行して視聴覚,特に生の映像を多く使用してきた。この方法を今回対象となった留学生のクラスで実践してみようと考えた。その理由として,留学生は大学院修了となる2年後には日本社会で仕事ができる日本語力が必要なこと,それは社会に入って同僚となる日本人と「今の日本」について話す機会があるということであり,さらにアジア人財の目標である,高度な日本語運用能力をもとにスムーズなコミュニケーションやディスカッションを可能にするビジネス日本語教育を行う必要があったからだ。ただし,前述のように入門から上級までの留学生が混在するクラスでの使用には従来の方法だけでは不十分だったため,使用する時期や内容によって方法を変え実践を繰り返した。授業では音声,映像,読み物など多くの生教材を使用した,本報告では使用した生教材のうち,特に映像をどのような視点で選び,教材として使用したのかについて述べる。さらに映像を使用した授業を

通じて留学生が発話量を増やし、将来必要になる語彙や表現を習得するために、授業でどのような工夫をしたのかについて述べたいと思う。

3. 映像を使う目的とそのメリット

生教材は『新・初めての日本語教育 基本用語事典』の中で「目標言語の世界で実際に使われているものを使用した教材」と定義されている。授業で使用したのは、主にテレビのニュースをそのまま、あるいは一部抜粋したものである。

授業に映像を多く用いた目的は、留学生が①2年後に共に働く日本人と「今」の日本について対等に日本語で話せるようになるため②レベル差のある留学生が無理なくそれぞれのペースに必要な語彙を増やし、同時に発話量を増やしていくことができるようにするため③社会人の日本語に必要なビジネス語彙（仕事に使えることば）や表現を増やすためである。映像教材は音声はもとより画像があることで情報伝達力としては、かなり大きな力がある。それは内容を音声からのみならず、画像からも容易に推測できることや場面や話し手の表情なども音声だけのときより、大きな助けになるので状況を把握しやすいからである。

授業に映像を使うメリットとして①1冊のテキストで対応するのが困難なレベル差のあるクラスにおいて、一つの教材をそれぞれの学習者に合わせて使うことができる②学習者それぞれの興味関心に応えることが可能になり③学習者が話したいという気持ちを喚起することが容易になるなどが挙げられる。「今」を感じることについては、沖田(2009)も「大学における日本語教育は卒業後まで視野に入れる必要」があり、それは「これからの社会を担う一員として世界に関する知識、世界を正確に読み解き、それに基づいて行動する教養を身につけることである」と述べていることから非常に重要な要素であると考えている。

4. 映像の選び方

教材として使用した映像は主にNHKの朝6時および7時のニュース、ドキュメンタリー番組、テレビ東京のワールドビジネスサテライト（以下WBSと記す）のニュースを録画したものである。

4-1. 1回完結型の映像

1回完結で使用する映像教材については、毎週撮り溜めした中から、留学生が興味関心を示し発話を喚起できるようなものを取捨選択した。基本は①時間的に短いもの（使用したのは3分前後のものが多かった）②事象の変化が明確にわかるもの③単純なもの④新鮮な驚きが得られるものである。これについてはKGCCで「定番教材」と呼び、以前より研修で繰り返し使用してきたものが多く含まれている。留学生の専門が工学系だったので実験のあるものも使用した。映像を理解するのに多くの説明が不要なため、使用する際、学習者の日本語のレベルを特に考慮する必要はない。

表2 使用した教材の例（1回完結型：定番教材）

チンパンジーの記憶力	NHK	11分03秒
夏の風物詩「蚊取り新世紀」	WBS	3分13秒

マイ箸	NHK	5分24秒
やさしいマーク広めたい	NHK	5分53秒
Table For Two	NHK	1分32秒
地下駐輪場に独自の技術	NHK	2分30秒
コンビニおにぎりなぜ同じ重さ?	WBS	6分44秒

4-2. テーマ設定型の映像

テーマに沿って使用する映像教材である。その年にどのようなテーマにするかを担当講師で相談して決め、それに沿って必要な映像を集めた。基本的に①時系列で扱えるもの②同じテーマの異なる側面について説明されているもの③比較しやすいもの④音声や新聞記事など、ほかの媒体からの情報が得やすいもの④留学生が意見の出しやすいもの⑤新しい発見のあるものなどを選んだ。その根底には、留学生が社会人になったときに先輩や同僚となる日本人と対等に日本についての話題で話ができるように「今の日本」を知ってほしいとの意図があった。平成23年には東日本大震災のため日本全土で節電が叫ばれたことを受け、節電をテーマに教材となる映像を集めた。

共通したテーマの下、賛成あるいは反対の両面が扱えるものが教材として使いやすい。テーマについてかなり深く理解していくことを踏まえて中級以上の学習者に使用することが望ましい。実際の授業では映像の前後に音声ニュース、新聞や雑誌の記事などを使い、考えるための参考資料とした。使用した教材およびテーマは以下の通りである。

表3 使用した教材の例（テーマ設定型）：節電：2011年度実施

節電と熱中症	NHK	6分50秒
節電の夏プール最新事情	NHK	5分06秒
電力不足 家庭の節電	NHK	7分30秒
タオルに打ち水効果	WBS	2分23秒
風力発電	NHK	4分34秒
ヒットランキング扇風機	WBS	4分59秒
次世代発電の可能性	WBS	9分30秒
意外なPC節電の方法	NHK	3分33秒

表4 授業で使用したテーマの例

平成19年度	成人年齢の引き下げについて	平成21年度	電子書籍
	格差について		ネットの功罪
平成20年度	キャリアパスを考える	平成22年度	節電
	日本の今をみつめる		食と社会
	コンビニ24時間規制		LCC航空

5. 使用方法

使用したニュースの内容、時間、視聴後に想定した達成目標によって以下の2つの方法を

用いた。

5-1. 方法1(1回完結型の映像を使う)

目標は客観的に物事を描写する力をつけることとした。1回完結で使用することから、扱う時間は1.5時間～2時間程度とする。ただし、視聴し理解した後、どのように授業を組み立てるのかによってはこれ以上の時間が必要なこともある。準備として語彙表をレベルに合わせて英語訳付、ルビ付、ルビなしなど幾通りか作成し、学習者が自身でどれを使うかを選択できるようにする。使用方法の流れは以下の通りである。

- ① どこに注意して見るか問題を出す。その後、視聴する。(理解度によって回数は異なる)
- ② 全体で問題の答え合わせをする。
- ③ ペアまたはグループワークでキーワードの整理をする。キーワードにすることばを決める。
- ④ ピア・ラーニングでまとめの内容を考えるが、産出されたものはレベルによって異なっておりよい。

まとめの方法の具体例としては以下の通りである。

- ・キーワードに沿って学習した語彙や表現を使い理解できたことを簡潔にまとめて書く。
- ・説明する、提案するなど話す対象や場面を意識し整理して話す練習を行う。商品の売り込みなどの場面設定をし、待遇・敬意表現が自然に使用できるようにロールプレイを行う。

5-2. 方法2(テーマ型の映像を使う)

目標は根拠のある意見を述べるができることとした。選んだテーマによって時間は異なるが一つのテーマを1.5時間の授業で2～3回、あるいは5～6回かけて扱い、完結する。語彙と表現の確認は、漢字圏、非漢字圏によって異なり、主に前者は漢字の読みと発音を重点的に扱い、後者は漢字の読みをクイズにし、さらに意味を確認した。

使用方法の流れは以下の通りである。

- ① どの部分の何に注意して見るかを提示し視聴する。(理解度によって回数は異なる)
- ② ペア、またはグループで内容を確認し、ポイントを整理した後、まとめを行う。この際、内容が理解できなかった場合は、ほかのペアに聞くなどを促してクラス全体が理解できるようにする。ピア・ラーニングで賛成、反対などの意見をだし、その根拠を考えるように指示する。

まとめの方法の具体例としては以下の通りである。

- ・意見を述べるための整理をし、簡潔に発表するための準備をした後、書く。
- ・内容によって、単独/ペア/グループなど様々な形で発表する。この際、整理したポイントを箇条書きなどにして簡潔に板書するように指示する。発表は板書を見ながら実施してよい。事前に簡潔にまとめる練習、書きことばと話しことばの相違点などを学習項目として扱っておく。
- ・学習者同士、または日本人を交えてディスカッションする。事前に、異なる意見の人とどのように意見を交わせばよいか、お互いに気持ち良く話をするためにはどのようにしたらよいかなどを話し合い確認することを学習項目として扱っておく。
- ・話し合った結果について理由を簡潔に説明しながらプレゼンテーションを行う。時間制

限の中で伝えたいことをきちんと述べる練習を行う。

6. フィードバック

方法1,2のいずれにおいても、口頭での発表については留学生同士でコメントを出し合い、共通の注意点については担当講師から指摘し、どのようにすればよいかを共に考えた。また書いたものについてはその場で発表した後、回収し、誤りの部分に下線を引いて返却した。提出物のうち教師が添削したものについては全員で読み、語彙、表現、文法の間違いなどを確認した。注意は以下の通り①内容②態度の両側面から行った。

6-1. 内容

映像クラスのほかに文法補充のクラスを実施していたが、その際、毎行っていたのが100字要約である。これは市販聴解教材、NHKニュースなどを聞いた後、理解できたことを100字にまとめる練習である。当初は字余り、字足らずが多かったが最終的には必要な内容を100字以内には書けるようになった。口頭発表の際にもこれを活かせるようにし、理解できたことを人に伝える際、どのようなことに注意すればよいかを留学生と共に考えた。その注意ポイントを下記のようにまとめた。

- ・初めて聞く人でも内容が理解できたかどうか。
- ・制限時間内におさまったかどうか。
- ・書いたメモをそのまま読まなかったかどうか。
- ・発音、アクセントに注意したかどうか。
- ・わかりにくいことばを言い換える、話すだけではなく、文字を書いて説明する、絵や図を描くなどして人に伝える努力をしたかどうか。

この最後のポイントは特に中国語母語話者の留学生が、話す際にわかりにくい漢語をそのまま使う傾向が強かったので、発表では録音し全員で聞き、わかりにくいことを確認した後、改善を促した。その結果、発表の時に使うことばを選ぶようになり、聞き手を意識した配慮のある話し方ができるようになった。

6-2. 態度

留学生たちは研究室のゼミなどで発表の機会は多かったが、担当教授から指摘を受けるのは、主に研究内容だったようだ。そこで、ビジネス日本語の時間で実施する発表では、上記の内容に加えて態度についての注意点を以下のように決めた。

- ・発表するときの立つ位置を考える。
- ・部屋と人数を考えて声の大きさを考える。
- ・話すスピードを考える。
- ・話すときの表情に気をつける。
- ・聞き手から「わからない」というサインを受けたら、何かできることで対応する。
- ・アイコンタクトをとる。
- ・理解されているかどうか、一方通行になっていないかどうかを確認する。
- ・書いたものを見て話すときにも顔はできるだけ上げて話す。
- ・板書や資料の配付のタイミングを考える。

また、複数で発表を行う際のそれぞれの役割についても確認した。当初は、話すことだけにしか注意が向かなかったが、回を重ねるごとに上記の態度についても意識が向くようになった。時には教師が発表の様子を録画し、全員で確認するようにした。その結果、留学生が所属する研究室の教授からも発表がかなりわかりやすくなったとの評価を得た。

6-3. ピア・レビュー

教室全体での発表の後にピア・レビュー（相互評価）を実施した。理由は、太田・児嶋（2007）が「教員からの評価と異なり、対等な立場で評価することは、たとえ批判的な指南であっても比較的容易に受け入れることが可能となる」と述べているように、対等の立場での評価はする方もされる方も大きな気づきになることが多いと感じたからである。前述のように映像を使った授業を実施したクラスは、留学生の日本語レベルに差があり、同じ映像を見ても理解できる内容はそれぞれ異なっていた。情報が充分にとれた者が、うまく情報をキャッチできなかった者からの質問に答えることは、結果として自身の発話量を増やすことにつながり、効果があったと考えている。

7. 結果

7-1. 方法1の結果

教材として選んだ映像は文字がなくてもかなりの部分が〔見てわかるもの〕であったので、レベル差のあるクラスでも十分に使うことができた。前述のようにレベルに合わせて語彙表を作成し、さらに留学生が自身で選択できるようにしたことから、留学生それぞれのペースに合わせて無理なく語彙や表現を増やすことができた。〔見てわかったこと〕をことばにして表現したいという学習者のモチベーションが発話を促したと考えている。その結果、目標としたビジネスシーンに必要な「客観的に描写する力」はある程度つけることができたと思われる。また、ピア・ラーニングでの学習者同士の学び合いの意識はクラスのレベル差をうめる一助となった。レベル差のあるクラスで学ぶことについて奥原・保坂（2004）は「他者との出会いと対話に関してより多くの対話を創出する」と述べておりレベルの差のある留学生同士での学びは有効であったと考えている。

7-2. 方法2の結果

大きなテーマを扱うことで、その問題についての①知識が深まり②根拠のある意見を述べることができ、さらに複数回におよぶ発表の経験から③簡潔に要点をまとめ④きちんと説明する力がついた。時系列で比較、対照させるなどのまとめる練習を話す、書く両面から行ったことで、結果として理解にとどまっていた語彙や表現、文法などがより実践的に使えるようになった。自国と比較するために自身で調査することなどを通して、お互いの学び合いの意識と「伝えたい」と思う気持ちが相乗効果を生み、当初、日常の挨拶程度に終始していた留学生があるテーマについて内容の説明にとどまらず、自信を持って意見を述べ、日本人とディスカッションすることができるまでの発話力をつけた。

8. 考察と今後の課題

方法1,2いずれにおいても、留学生の興味関心を引く教材が「話したい」「伝えたい」という気持ちを喚起し、それが自発的な発話を促したと考えている。教材は特に語彙の制限をしなかったが、それがプラスにもマイナスにもなり得ることを意識しておく必要がある。方法1では、並行して必要な初級文法の授業を実施したが、方法2では使用した教材の中から中上級文法、機能語、表現などを取り出して扱っている。そのため、選んだ映像や読解教材の中に学習者が学ぶにふさわしい語彙や表現が含まれているかどうかを常に検証する必要がある。検証する基準は、アジア人財の留学生が受験必須となっていたビジネス日本語能力テストで扱っている語彙ならびに表現とKGCCで実施してきた長年にわたる企業研修から得た教師の経験値とした。(表5,表6は授業の使用教材のSCRIPTから選び出したN2以上の語彙でなおかつBJTビジネス基本語彙にあるもののリストの一部である。)今回は留学生が大学院修了後、社会人として必要になると予測される語彙を「仕事に使えることば」と定義した。今回は発話の中にこれらの語彙や表現を使用することを目的としたが、この定義が適当か否かも今後の検討課題であると考えている。

教材使用の側面から考えると、使用できる音声、映像、読み物という生教材を選ぶ教師の的確な「目」とセンスも必要になるであろう。テーマ決定→教材探し→準備(SCRIPT起こし)→授業という一連の流れは基本であるが、教師自身が日本の「今」を感じ理解することも重要になってくる。学習者の「話したい」「伝えたい」という気持ちを喚起できる教材を探し実践に結びつけるために教師には何が必要なのかを考えていくことも課題である。

9. ポスター発表から得られた知見

ポスター発表での質問の中で一番多かったのが「どのようにして教材となる映像を集めるのか」ということであった。そのほかには「その映像にしようとする誰が決めるのか、毎回協議して決定するというシステムでは時間がかかって大変なのではないか」「使われている語彙が難しく学習者がわからないということはないのか」などもよく聞かれた。前述のように使い方によって選ぶ映像が異なるため、常にアンテナを張って使える教材を探す必要がある、その点では確かに「大変だ」というイメージを持たれることもあろう。また「誰が決めるのか」という点では、今回映像クラスを担当した教師全員が次回は「このような映像を使おう」という明確なイメージを共有していたため、実際にはほとんど問題になっていない。しかし課題でも触れたが意識を共有できる教師をどう育てていくかということが重要になってくることも確かである。教師がそれぞれの学習者に合う生教材は何かを考え、学習者のために、いかに「教材として調理するか」ということを常に考えていけるような環境作りという点も今後考えていく必要があることが明確になった。

語彙については、考察の部分でも述べたが今後の大きな課題である。映像教材を使う際に、語彙をどのように提示するのかという質問が多かったことからそれが窺えた。今後、映像を使う際には語彙についての課題も含め、以下の点を常に意識していきたいと考えている。それは①様々なレベルから学習を始める留学生がいつ、どのような方法でどの程度の語彙量を学習していくことが効果を上げるのかを考える②社会人になったときに必要になる語彙とは何かを考える③映像を単なる情報提供に終わらせず、学習効果の上がる方法で使い切るために、何が必要なのか、どのような教材がより効果を生むのかを考える④今回試行錯

誤の末に生み出した方法2以外にも、より良い方法がないか考える⑤映像を効果的に使うために、その前段階として何が必要なのか、それをどのように使うのかを明確にしていくことなどである。課題山積ではあるが、発表の際、「ぜひ試してみたい」「難しいと思っていたけれど、授業で扱ってみたくなくなった」などの声が聞かれたことも確かであり、市販教材を使うだけでは対応の難しい現場にこそ生教材が生きてくるのではないかとの実感も得た。

表5 定番教材のスク립トから抽出したビジネス語彙・表現の一部

チンパンジーの記憶力	維持する・獲得する・掲載する・結果	～に対して・～につれて・～ような
夏の風物詩	影響する・期待する・キャッチフレーズ	～とともに・～ながら・～かどうか
マイ箸	開発する・機能・共通・コーディネート	～がきっかけで・～にくい・～わけだ
やさしいマーク広めたい	設置する・デザインする・配慮・優先	～が中心となって・～として・～に関わる
Table For Two	開設する・拡大する・管理・提供する	～を通じて
地下駐輪場に独自の技術	現実・技術・建設する・最新・産業	～ないように
心理エコノミー	印象・ギャップ・好調・購買・メーカー	～からいえば・～っぽい・～づらい

表6 「節電」で使用した映像のスク립トから取り出した語彙,表現などの一部

節電と熱中症	安定・抑える・可能性・企業・供給	～いっぱい・～を占める・～べき・～場合
節電の夏プール最新事情	義務・掲示・検討する・戦略・導入	～代わりに・～をめぐって・～きる
電力不足 家庭の節電	株式・機種・削減する・試算する・市場	～と比べて・～ほど～ない・～ところだ
タオルに打ち水効果	効果・今回・申請・特許・比較する	～というよりは
消費電力一目瞭然	確保する・心配する・請求・対応する	～の際
風力発電	安定する・課題・環境・競合する・研究	～ように・～た結果
ヒットランキング扇風機	意識する・価格・実績・店頭・付加価値	～に関して・～といえは・～ながらの

10. 参考資料：映像を使った授業の後に書いたものの比較

(1) 入門の学習者（ひらがな,漢字などは学生が書いたものをそのまま転記した）

1) 当初：使用教材「Table For Two」

かいしゃいんは ひるごはんをたべますは¥500です。¥20はきふでうえにくるしむだから、このかつどうはかいしゃいんはげんきです。

2) 半年後：使用教材「コンビニおにぎりなぜ同じ重さ」

日本では、おにぎりのはじめてせいさんは1962年です。おにぎりはコンビニのていばんです。いろいろなかたちがあります。たとえば、三角形とまるもあります。

おにぎりのおもさは100gぐらいです。いまは おにぎりのつくる方はぜんぶんきかいをつかいます。この技術はしんかをとげるになります。いろいろおな具があります。たとえばツナマヨやあんこです。日本ぜんこくは800万個つくります。

(2) 初級の学習者（ひらがな,漢字などは学生が書いたものをそのまま転記した）

1) 当初：使用教材「Table For Two」

テーブルフオーツというNPOは日本にある会社に国際貢献をする食堂をつくりま

した。そこでは食事代の中で20円を途上国の飢えに苦しむこどもにきふします。こんなにしたら、いいことがふたつあったとにゅーすはせつめいしました。ひとつはうえにくるしむこどもをてつだえることです。そしてほかのひとつはじぶんのけんこうかんにやくたてることです。NPOが食事のカロリーをかんりしてあげたからです。

ニューヨークにあたらしいじむしょを作ってこのかつどうにさんかするかいしゃをあつめるよていです。

2) 半年後：使用教材「コンビニおにぎりなぜ同じ重さ」

日本全国で生産されるおにぎりは1にち800万個以上です。全て同じ重さご同じ形を持っていて具は正確に真に入っています。これを1回にできるようにする機械があります。ふくおかのはたかにある富士精機という会社がもっている機械です。この機械はももとはおまんじゅを作る機械でしたがコンビニの数が増えておにぎりの消費が増える時代によっておにぎりの機械にシフトしました。

このおにぎり機械に色々な独自技術が入っています。1番目は真空冷却技術です。これを使うと最近ができることが守れます。2番目は特殊なほぐし羽根です。ごはんを炊く後しゃもじでほぐすようにする技術です。こうするとご飯の中に空気がたくさん入って2倍以上のやわらかさを持つようになります。3番目はおにぎりの重さを100gにあうための微調整の技術です。まず90gのご飯をおいて、後からの誤差をほぐし足しながら合わせる技術です。大量生産をする場合には1gの誤差ができれば、100万個には1tになってしまうので正確な重さが大切です。こういう全ての技術は市場の多様化にあうための結果です。

参考文献

- (1) 池田玲子・館岡洋子(2007)『ピア・ラーニング入門－創造的な学びのデザインのために』ひつじ書房
- (2) 太田伸幸・児嶋文寿(2007)「講義ビデオの自己評価を用いた教授能力向上に関する実践－教科教育法Ⅱにおける学生による模擬授業を対象とした取り組み－」『愛知工業大学研究報告』第42号A
- (3) 沖田弓子(2009)「世界知識の拡大を目標とした『日本語聴解』授業の報告」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』第24号
- (4) 奥原淳子・保坂敏子(2004)「レベル差のあるクラス間にある合同授業の可能性」『講座日本語教育 第40分冊』早稲田大学日本語研究教育センター
- (5) 久野由宇子「ピア・ラーニングを取り入れて口頭表現力を伸ばす方法を探る－「4コマ漫画のストーリーをピアに伝えるタスク」の試み－」WEB版「日本語教育実践研究フォーラム報告」2007年度版日本語教育実践研究フォーラム
- (6) 瀬川由美・北村貞幸・植松真由美『BJTビジネス日本語能力テスト聴解・聴読解実力養成問題集』別冊(2008)スリーエーネットワーク
- (7) 高見澤孟・伊藤博文・ハント蔭山裕子・池田悠子・西川寿美・恩村由香子(2009)『新・はじめての日本語教育 基本用語事典』株式会社アスク出版
- (8) 村木佳子・藤本祥子(2005)「生素材を利用した読解・聴解指導－タイ・シラパコーン大学「メディアの日本語Ⅰ」実践報告－」『日本語教育と異文化理解』第4号